

○藤原 道弘<sup>1</sup>

<sup>1</sup>福岡大薬

21世紀に入って以来、大学生、高校生、スポーツ選手、芸能人そして主婦などの大麻汚染が年々増し、社会的に深刻化している。特に数年前から乾燥大麻の押収量だけでなく有名大学の学生の検挙者数も著しく増え、昨年度は過去最悪になった。

若者の間に広がる大麻汚染は、「興味感覚」や「ファッション感覚」などを特徴とし、インターネットの密売サイトを介した大麻自家栽培の急増、法規制を緩和する諸外国とのグローバル化、若者の海外経験、外国人密売者からの大麻タバコの入手の容易さなどが、この傾向にさらに拍車をかけている。

「タバコや酒より害が少ない」、「最高の気分が味わえる」、「イライラがとれてスッキリする」、「みんなやっている」、「一度だけなら大丈夫」、「やめようと思えばいつでもやめられる」など間違った知識からくる罪悪感の薄さから手を出すケースがほとんどである。このような環境の中ではこれまでの法規制による抑制にも限界があるため、若者が薬物乱用や薬物依存症を理解し、大麻が及ぼす害を正確に知ることが大切である。

大麻による精神活動の特徴として、知覚機能、思考過程、情動あるいは気分の異常が現れる。これらの精神作用の中心物質は $\Delta^9$ -tetrahydrocannabinol であり、大麻の作用は個人の性格、教養、服用時の環境、気分あるいは効果の期待度によって大いに左右される。このことが、他の乱用薬物の作用様式と全く異なり、大麻の危険性を示している。本講演は、大麻のヒトへの作用を動物からみた我々の研究と他の乱用薬物との作用を比較することによって、大麻の作用を明確にし、大麻の危険性と違法性を訴えていくものである。